



オンライン
同時録画配信

第136回 日本森林学会大会 公開シンポジウム

北海道の 広葉樹資源を活かす

2025年3月20日 (木祝) 13:00-16:30

プログラム

- 13:00 ~ **開会挨拶** 正木 隆 (日本森林学会会長)
- 13:05 ~ **趣旨説明** 明石信廣 (北海道立総合研究機構 林業試験場)
- 13:10 ~ **講演1** 北海道の広葉樹マーケット:これまでとこれから 嶋瀬拓也 (森林総合研究所 北海道支所)
- 13:40 ~ **講演2** 旭川家具における北海道産広葉樹利用促進の現状 藤田哲也 (旭川家具工業協同組合理事長、株式会社カンディハウス代表取締役会長)
- 14:10 ~ **講演3** 広葉樹資源の有効利用と高価値化のために 秋津裕志 (北海道立総合研究機構 林産試験場)
- 14:40 ~ **休憩**
- 15:00 ~ **講演4** 北海道の広葉樹:育てていくために必要なこと 吉田俊也 (北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター)
- 15:30 ~ **話題提供1** 国有林での天然林施業のあり方~公益的機能の増進と持続可能な広葉樹材の供給~ 寺村 智 (北海道森林管理局 計画保全部 計画課)
- 15:40 ~ **話題提供2** 道有林における広葉樹資源の活用事例~人工林内の広葉樹を利用する~ 野村具弘 (北海道水産林務部 森林海洋環境局 道有林課)
- 15:50 ~ **休憩**
- 16:00 ~ **パネルディスカッション** コーディネーター: 明石信廣 パネラー: 嶋瀬拓也・藤田哲也・秋津裕志・吉田俊也・寺村 智・野村具弘
- 16:30 ~ **閉会挨拶** 明石信廣

北海道の広葉樹マーケット：これまでとこれから



嶋瀬拓也 しませたくや

森林総合研究所北海道支所
地域研究監

1971年滋賀県生まれ。専門は林業経済学。主に木材産業の歴史を研究。木材産業の発展のあり方を比較的に明らかにするとともに、その成果を手がかりに現状理解と将来展望に取り組んでいる。

広葉樹材を使う産業の代表ともいえる家具産業や床板産業に、2010年頃から回復の兆しがみられます。しかし、これらの産業を長年支え続けてきた外国産広葉樹材の輸入が減り、価格が上がる一方で、国内の広葉樹材素材生産量にも目立った回復がみられないため、いま、これらの産業は、材料の調達難に直面しています。こうした中、家具産業や床板産業の間に、従来あまり使ってこなかった樹種やサイズの丸太を使う動きが広がっています。広葉樹材を供給する側にも、たとえば北海道国有林などでは、人工林に天然更新したいわゆる侵入木を積極的に育成し、利用する方針を取り入れるなど、需要の変化に対応する動きがみられます。需給双方によるこうした取り組みの結果、今日では、人工林侵入木が、北海道産広葉樹材の主要供給源となりつつあります。しかし、人工林侵入木には質・量ともに限界があるため、天然林からの出材を求める声も高まっており、天然林の育成と利用の両立が求められるようになってきました。その実現には、森林・林業・林産業のすべてが良好な状態に保たれたまま、それぞれ成長・発展していくことが重要であり、そのためのしくみづくりが緊急の課題といえます。



旭川家具における北海道産広葉樹利用促進の現状



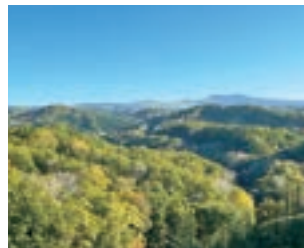
藤田哲也 ふじたてつや

旭川家具工業協同組合理事長
株式会社カンディハウス 代表取締役会長

1960年北海道七飯町生まれ。1982年株式会社インテリアセンター(現 株式会社カンディハウス)に入社、2013年代表取締役社長、2021年から現職。国際ビジネスの拡大、デザイン経営の推進、旭川家具の産業観光への挑戦、北海道産広葉樹利用促進研究会の立上げ、デザイン活動を通じ地域産業の活性化を応援する取り組みを行ってきた。

北海道の豊かな森林資源は、家具産業を含むさまざまな地域産業の重要な基盤となっています。今回の発表では、北海道産広葉樹の利用促進に焦点を当て、旭川家具工業協同組合を中心とした取り組みを紹介します。関係する企業や各試験研究機関等による研究会活動を通じて、道産広葉樹の資源量把握、強度特性評価、利用可能な樹種選定を進め、新たな製品開発に資する具体的な成果をお伝えします。特に、広葉樹材の安定供給と原材料価格高騰への対応、家具材としての適用性向上を目指す具体的な戦略や方向性をお示します。

また、国有林からの計画的な供給確保に向けた要望活動の取り組みなど、持続可能な森林活用と地域経済振興の循環についても触れる予定です。この発表を通して、北海道の自然資源を最大限に活用した地域発展の方向性を考察します。



▲BARCA LUX ラウンジチェア
(樹種:北海道ナラ)



▲フラン リビング イージーチェア
(樹種:北海道タモ)



▲KINA LUX キナフロアーC(樹種:北海道カバ)



▲WING LUX LD アームチェア
(樹種:北海道ナラ)

広葉樹資源の有効利用と高価値化のために



秋津裕志 あきつひろし

北海道立総合研究機構林産試験場
専門研究員

1960年大阪市生まれ育ち。専門は木材物理学、木質材料学。北海道の広葉樹を効率的に利用するため、木材の物性を明確にし、その特性を活用できる用途を開発することで、資源の持続的な利用の実現に寄与する研究を行っている。

優良とされてきた広葉樹は、建築、家具、クラフトや器具など多くの用途に活用され、価格の面からも林業、林産業には価値の高いものです。しかし、資源量、更新サイクルの長さや育林が困難であることから安定供給が難しく、外国産材に依存してきました。近年、輸出国の都合や為替による価格の高騰で、国産広葉樹を活用する機運が高まっていますが、現状の供給は、針葉樹人工林の侵入木や一般材としてあまり活用されていない広葉樹です。北海道においては、資源量が多く、更新や育林が比較的容易なカンパ類に対し、新たな次世代更新技術が開発され、成長の促進と原木の安定供給を目指しています。一方、加工においては材料特性に合わせてさまざまな製品が製造されるとともに、新たな用途も開発されています。今後、カンパ類の育成による原木の安定供給と活用により、それぞれが経済的に成り立つことで循環利用が確立されると考えられます。また、他の広葉樹にも展開されることで、多様な国産広葉樹の活用が期待されます。



北海道の広葉樹：育てていくために必要なこと



吉田俊也 よしだとしや

北海道大学
北方生物園フィールド科学センター 教授

1967年神奈川県生まれ。専門は造林学。利用と保全との両立を目指した林業について研究。北海道大学研究林をおもなフィールドとして、天然林施業に係る択伐や天然更新の課題に取り組んでいる。

北海道の森林蓄積の約半分を占める広葉樹に、近年とくに利用面から注目が集まっています。しかし、広葉樹の育成は技術的に未確立で、シカによる食害も顕著な状況下で、その実行は容易ではありません。たとえば、広葉樹の人工林は、針葉樹とくらべると、概して育成に手間と時間を要するため面積的にごくわずかです。今後、持続的な材の供給を目指すためには、針葉樹人工林に混交させて育成するような試みも含め、技術的な指針の確立が必要です。また一方で、短中期的な材の供給のためには、現在手が加わっていない二次林の除間伐を進めることも強く求められます。より発達した天然林では、かつて広く実施された択伐施業も選択肢になりますが、対象としうる蓄積・質をもつ林分は必ずしも多くなく、また、更新（樹木の世代交代）が課題となります。重機で林床のササなどを取り除いた後、自然の種子散布で更新できるカンパ類は、近年用途が拡大して需要が高く、天然林利用の「鍵」となる存在です。広葉樹の持続的な育成のためには、地域や立地条件に応じてさまざまな方法を組み合わせる必要があるため、そのためには相応の労力・コストの投入が必要と言えます。



話題提供

1

国有林での天然林施業のあり方 ～公益的機能の増進と持続可能な広葉樹材の供給～



寺村 智 てらむらさとし

林野庁北海道森林管理局計画保全部
計画課長

1978年和歌山県生まれ。2001年に林野庁に入庁し、国有林野事業を中心としながら、白書の執筆、在外公館勤務、環境省や市町村への出向といった勤務経験を通じて森林・林業行政に関わってきた。現在は国有林の森林計画や管理経営計画の樹立を担当し、その中の1つの課題として持続可能な広葉樹供給のあり方について検討を進めている。

話題提供

2

道有林における広葉樹資源の活用事例 ～人工林内の広葉樹を利用する～



野村 具弘 のむらともひろ

北海道水産林務部森林海洋環境局
道有林課長

1974年北海道旭川市生まれ。1999年に北海道庁に入庁し、道有林の計画編成や森林整備などの業務をはじめ、担い手対策や木材産業の振興など、川上～川下の林務行政分野を担当。2024年4月から現職。

司会進行



明石 信廣 あかしのぶひろ

北海道立総合研究機構林業試験場
保護種苗部長

1969年大阪府寝屋川市生まれ。1996年から北海道立林業試験場(現 北海道立総合研究機構林業試験場)にて、主にエゾシカをはじめとした鳥獣害対策や、林業と生物多様性保全の両立を目指した保持林業の実証実験などの試験研究に関わってきた。2023年から現職。

主催 一般社団法人 日本森林学会

共催 公益社団法人 国土緑化推進機構

後援 北海道大学

問合せ 136symposium@forestry.jp

